

政を爲すは禮を先きにし、禮は政の本か。(同上。同上)

等の如き、又禮と樂とを併せ説けるものは、  
顔淵邦を爲むるを問ふ。子曰はく、夏の時を行ひ、殷の輅に乗じ、周の冕を服せよ、樂は則ち韶舞、鄭聲を放ち、佞人を遠ざけよ、鄭聲は淫、佞人は殆し。(衛靈公)  
子曰はく、風を移し俗を易ふ、樂より善きはなし、上に安んじ民を治むる、禮より善きはなし。(孝經)

子張政を問ふ。子曰はく、中庸君子、禮樂を明かにし、擧げて之れを錯くのみ。

(禮記仲尼燕居篇)

等の如き其の主要なるもの也。

禮樂は政教の上に此くの如く重大なる關係あるものなるが故に、下たるものは、之れが制作改易を自由にする能はず、其の政教に於ける威嚴及び効果は、今の法令に同じく、法令及び宣戰媾和は必らず一主より出でざるべからざると同じく、禮樂も亦統治の大權の一部たるべきものなりとす。

天下道あれば、則ち禮樂征伐、天子より出づ。(季氏)

といへるもの是れ也。

禮樂は何故に政教の主要なるものなりやといふに、既に訓育章下に概説したるが如く、人心を感化するに於いて缺くべからざるものなれば也。大戴禮に丘、之れを聞く。民の由りて生ずる所、禮を大なりとなす、禮に非ざれば、以て天地神明に節事するなき也、禮に非ざれば、以て君臣上下長幼の位を辨するなき也、禮に非ざれば、以て男女父子兄弟の親、婚姻疏數の交を別つなき也。(哀公問於孔子篇)

とあり、禮記哀公問篇亦之れを載す、社稷祖宗天神地祇の祭典を怠らざること、及び社會の秩序を維持することは、當時の政教に於ける二大眼目なるが故に、禮は恰かも之れに適切なるものとなす也。

夫れ、祭祀は饋養を致すの道也、死してすら且つ思慕して饋養す、況んや生きて存するものに於いてをや。故に曰はく、喪祭の禮、明かなれば則ち民孝なり矣と。故に不孝の獄あれば、則ち喪祭の禮を飭する也。凡そ、上を弑するは、義の明かならざるに生ず、義は貴賤を等し、尊卑を明かにする所以、貴賤、序あれば、民

上を尊び長を敬す、民、上を尊び長を敬して、而して弑すものは、之れあること寡なき也。朝聘の禮は義を明かにする所以也、故に弑獄あれば、則ち朝聘の禮を飭する也。凡そ、鬪辨は相侵陵するより生ずる也、相侵陵するは、長幼、序なきに生ず、而して教ふるに敬讓を以てする也。此一旬衍ならんと古故に、鬪辨の獄あれば、則ち郷飲酒の禮を飭する也。凡そ、淫亂は男女別なく夫婦義なきより生ず、婚禮、享聘は、男女を分ち夫婦の義を明かにする所以なり、故に淫亂の獄あれば、則ち婚禮、享聘を飭する也。（大戴禮盛徳篇、禮記哀公問篇に之れ）

是れ孔子の語にわらずと雖も、孔子の思想を祖述せるものと見らるべく、禮と政教との關係を説くこと頗る明か也。但し此こに所謂禮とは、特殊なる一の儀禮につきていふのみなれど、禮とは、制度式典の大より、日常相互の作法容儀の小に至るまで、之れを含むものにして、社會を構成する分子をして調和せしむる所以なるもの、及び孔子が禮を重んずるに過ぎて、其の弊亦之れに伴ひしは、屢述べたる所の如し。

樂と政教

樂が政教に用ゐられたるは既に堯舜よりの事にして、樂徳を述ぶること、尙書

の言ふ所を以て至れり盡せりとなすが故にや、孔子は、樂の重んぜらるべきは、殆んど自明の理なるが如くに思爲せりと見え、其の何故に然るべきやにつきては説くことなかりき。たゞ其の訓育的意義の見らるべきものは既に之れを擧げたり。而して政教に及ぼす所の音樂の影響につきては、荀子及び樂記に至りて極めて詳なり。今孔子の思想を解説したるものとして、樂記の二三節を抄録すべし。

凡そ音は人心に生ずるもの也、樂は倫理に通ずるもの也。是の故に、聲を知りて、而して音を知らざるものは、禽獸是れ也。音を知りて、而して樂を知らざるものは、衆庶是れ也。唯、君子能く樂を知ると爲す。是の故に、聲を審かにして以て音を知り、音を審かにして以て政を知り、而して治道備はる矣。

樂は樂也、君子樂しみて其の道を得、小人樂しみて其の欲を得。道を以て欲を制すれば、則ち樂しみて亂れず、欲を以て道を忘るれば、則ち惑いて樂しまず。是の故に、君子情に反りて以て其の志を和し、樂を廣うして以て其の教を成す、樂行はれて、而して民、方に郷ひ、以て徳を觀るべし。徳は性の端也、樂は徳の華

也、金石絲竹は、樂の器也。詩は其の志を言ふ也、歌は其の聲を詠する也、舞は其の容を動かす也。三者心に本づき、然して後樂器之れに従ふ。是の故に、情深くして、文明かに、氣盛んにして、化神なり。和順中に積みて、英氣外に發す、唯樂は以て偽を爲すべからず。

要は音樂は衷心より民の性情を感化すべく、政教上極めて尊重すべしといふものなり。然るに孔子は道德と法律との未だ全く分れざる周以前の政教を夢み以て禮樂のみ鼓吹せるも、樂記は、既に戰國以還、法令にあらざれば政治は行はれざる時勢の進運に乗じたるが故に、

先王之れを感ずる所以のものを慎しむ、故に禮以て其の志を道びき、樂以て其の聲を和し、政以て其の行を一にし、刑以て其の姦を防ぐ、禮樂刑政其極一也、民を同じくして、治道に出づる所也。

と云ひ、禮樂刑政の四つに分ちて、各其の特殊の任務あるに注意したるは、既に近世國家の行政思想に近く、孔子の思想を進めたること一步なりといふべし。但し『政以て其の行を一にし、刑以て其の姦を防ぐ』といひ、亦之れを教化的に見

たるは、依然として政教一致の見を失はずといふべし。凡そ政教一致なるもの之れを上代に行はれたるが如くならしめんは、固より能はずと雖も、一切の政治が教化的の意義を有し、一切の吏僚が教育者たるの信念を有することは、近世の國家に於いて、殊に必要なりと信ず。此の點に於いて、政教一致を舊夢なりといふなかれ、今樂記の言に因みて特に一言を附記す。

本書に於いては、孔子以前の學說又は思想につきて、孔子に關係あるものは、しばしば之れを述べしも、孔子の後に於いて之れを祖述發展せるものは、殆んど之れを避けたり。されど、此に至りては、荀子の禮樂論のみは、其の大要を序述するを禁ずる能はず、何となれば禮樂をいふの極めて明瞭にして、且つ今より之れを讀みて最も興趣あるは、古今一の荀子に優るものなければ也。荀子は、大に意を社會に致せり。

水火は氣ありて而して生なし、草木は生ありて而して知なし、禽獸は知ありて而して義なし。人氣あり、生あり、亦且つ義あり、故に最も天下の貴たるなり。力は牛に若かず、走ること馬に如かず、而して牛馬、用をなすは何ぞ、曰はく、人

能く群す、彼れ群する能はざる也。人何を以て能く群す、曰はく分。分何を以て能く行はる、曰はく義を以てす。故に義以て分すれば則ち和、和なれば則ち一、一なれば則ち力多し、力多ければ則ち疆し、疆ければ則ち物に克つ。中略故に人生れて群なき能はず、群にして分なければ則ち争ふ、争へば則ち亂る。中略少頃しほらくも舍つべからざるは禮義の謂也。(王制篇)

といへる、頗る社會進化論に觸れたり。先づ無機物と有機物とを分ち、有機物の中に草木、禽獸、人間の三級を分ち、人間が竟に優者として生存競争場裡に勝を占めし所以を推究して、是れ人間には特に『群』即ち社會といふものあるに因るとなし、故に人間は此の社會の圓滑なる調和を謀り、之れを維持存続せざるべからずとし、此れが爲めに禮義は必然の産物にして當然の規制なりとなせり。而して又

人生れて欲あり、欲して得ざれば、則ち求めなき能はず、求めて度量分界なければ、則ち争はざる能はず、争へば則ち亂れ、亂れば則ち窮す。先王其の亂を惡みてや、故に禮義を制し、以て之れを分ち、以て人の欲を養ひ、人の求めを給す。

### (禮論篇)

と云へり。即ち禮とは、各人の欲求欲望の衝突を防止し、以て人類社會の安寧と圓滑とを保持するものとなせり。又樂につきては、

人樂しまざる能はず、樂しめば則ち形かたちるゝなき能はず、形れて道を爲さざれば、則ち亂なき能はず。先王其の亂を惡みてや、故に雅頌の聲を制して、以て之れを道びき、其の聲をして、以て樂しみて流れざるに足らしめ、其の文をして、以て辨にして認ならざるに足らしめ、其の曲直繁省廉肉節奏をして、以て人の善心を感動するに足らしめ、夫の邪汙の氣をして、接するに由なからしむ。(樂論篇)といへり。即ち樂とは、人情の亂に趨くを制し、中和を得せしめ、以て善に遷らしむるものとす。

荀子が禮と樂との關係につきていふ所は、更に見るべきものあり。

樂は、和の變すべからざるもの也。禮は、理の易ふべからざるもの也。(同上)と云ひ、樂は和、即ち情よりする教化、禮は理、即ち知よりする教化なるを示し、又之れを導くに理を以てし、之れを養ふに清を以てす。(解蔽篇)

といへる、理とは禮にして、清とは樂ならん、されば禮は導くもの也、樂は養ふもの也、一は知的にして、他は情的に、一は直接的にして、他は間接的なるの別あり。又樂は同を合し、禮は異を分つ。(樂論篇)

といへり。凡そ人の社會を爲すや、一見矛盾するが如き二性あり、一は特殊性にして、他は普汎性なり、一は自我を基本とし、他は同情の發展なり。是れ宛かも分業が相分るゝこと細かなるを加ふるだけ、それだけ、相結びて一となるの連鎖は益、密なるを加ふがる如く、此の二性は寧ろ矛盾せざるのみならず、個人の進歩と共に全體の發達に與かるものにして、此れあるが故に、社會をなし、社會は鞏固を加へ、いよゝ發達す。而して此の二者は又情と知との別にも見らる。情は同じかるべく、知は異なるべし。社會の各分子が、成るべく其の情を同じくし、成るべく其の知識隨つて作用職業等を異にすれば、社會と稱する有機物は、其の繁榮を加へ來ること勿論なり。共に歸する所は社會の調和及び發達に在りと雖も禮と樂との職能には此くの如き差ある也。シュライエルマッヘルは、訓育の二方面を、特殊より普通に、普通より特殊にといへり。荀子は樂を以て、情よりする、同的

方面、普通的方面の教化とし、禮を以て、知よりする、異的方面、特殊的方面の教化となしたるが如し。因にいふ、樂記に之れと全然同じき意見あり。

樂は同をなし、禮は異をなす。同じければ則ち相親しみ、異なれば則ち相敬す。樂勝れば則ち流れ、禮勝れば則ち離る。情を合し、貌を飾するものは、禮樂の事也。禮義立てば則ち貴賤等あり矣、樂文同じければ、則ち上下和す矣。

此の『貴賤等矣』の等は均等の意ならずして、等級等差の義なるは勿論なり、又樂は天地の和也、禮は天地の序也。和、故に百物皆化す。序、故に群物皆別つ。等の文是れ也。是等は、荀子が樂記に取る所あるか、若しくは樂記が荀子に負ふ所あるかは、容易に決し難しと雖も、樂記の文の先秦的ならざると、禮樂異同の説は荀子の持論にして、首尾貫通せるに、樂記の突如として此の言あるより見て、樂記が荀子を襲へるものなるを信せんと欲す。

### 第三章 國語統一論

子思今の中庸の著者は少しく之れに着眼せしも、孟子は之れを輕く看過し去り、荀子に至りて大に之れを祖述し而して秦の始皇の之れを極端に急激に而して多少其の眞の目的以外に走せ逸して採用したる後系を有するものなるに於いて、孔子の國語統一論は、之れを研究するは、頗る必要にして且つ趣味ありとす。

孔門教授法章下に述べたる如く、孔子は詩書執禮を雅言して、自ら中華の正音を用ゐたりしが、又汎く之れを世に及ぼして、政府の事業を以て國語を統一せんことを希圖したりと見え、之れを以て政教の最も重んずべき發端となさんとしたり。

子路曰はく、衛君子を待ちて政を爲さば、子將に奚をか先きにせんとする。子曰はく、必らずや名を正さんか。子路曰はく、是れあるかな、子の迂なるや、奚ぞ其れ正さんや。子曰はく、中略名正しからざれば、則ち言順ならず、言順ならずれば、則ち事成らず、事成らざれば、則ち禮樂興らず、禮樂興らざれば、則ち刑罰中らず、刑罰中らざれば、則ち民措く所なし、故に、君子之れに名づくれば、必らず言ふべき也、之れを言へば必らず行ふべき也、君子其の言に於いて苟くもする所

なきのみ矣。(子路)

此の解『正名』を以て『名分を正す』となせるものあれども、若し然りとすれば、禮樂名教を以て不斷訓誨されつゝある逸尼子路にして、『是れある哉、子の迂なるや』の惑を起さしむべき謂はれなし、古註を以て是とせん、馬融は『名』に註して、

百事の名。

といひ、鄭玄は解して、

名を正すとは、書字を正すをいふ。古は名といひ、今世は字といふ。禮記に曰はく、百名以上は、則ち之れを策に書すと。孔子、時教の行はれざるを見、文字の誤りを正さんと欲す。

といへり。『名』とは名號名稱にして、物の名、事の名なるが故に、今の所謂名詞のみならず、事物の符徴として口より發するもの、即ち或る觀念に名づけしもの皆『名』なり、即ち名とは言語なり、文字は言語を寫すものなるが故に又『名』なり。されば『名』とは、言語文字の謂なること、古典歴々之れを證す。

黄帝、名を百物に正しくして、而して蒼頡、文字を制す。(禮記祭法篇)  
百名以上は策に書し、百名に及ばざるは方に書す。(儀禮聘禮篇)

書名を四方に達することを掌る。(周禮春官外史)

其の他後に擧ぐる所の管子の言、中庸の語など皆是れ也。此の周禮の『書名』につきては二説あること鄭註に見ゆ、一説は尙書の篇名となせるも、其の無意義一笑に付すべきのみ、『古へは名と曰ひ、今は字といふ、四方をして、書の文字を知りて、能く之れを讀むを得せしむ』といへるもの當れり。何となれば

書の文字を同じうす。

とは、始皇が一統の大業を賛美するの意として、石碑中に刻せる文句にして、古來天下一王の理想は此に在りしを以て也。

我が朝古來文字を訓して『ナ』といふ、眞字、假字、新字を訓して『マナ』『カナ』『ニイナ』といふが如し。亦以て参照すべきか。

尙ほ荀子の正名論を参考すれば『名』とは何如、『正名』とは何如の意極めて明瞭なれども、今皆之れを省く。尙ほ此の章につきては、曾て史學雜誌に始皇焚書の由來を

名と禮との關係

論ぜし長友長井金風君の、炯眼にしてサツゼスチーフなるに貢ふ所甚だ多し。

名とは物に名づくる語なり、故に一の事物と他の事物とを區別する所以なりとす。即ち名を重んずるは、禮を重んずると同一の思想なり。禮は秩序を分つ所以、即ち分別にして、名も亦分別なり、故に名正しければ、禮も亦正し。儀禮喪服の子夏の傳なるものに、名により禮を定むるの例あり。いふ、

其の夫、父道に屬するものは、妻皆婦道なり。其の夫、子道に屬するものは、妻皆婦道なり。弟の妻を婦といふものは、嫂も亦之れを母といふべきか。故に名は人治の大なるもの也、慎しむなかるべけんや。

乳母、傳に曰はく、何を以て總するや、名を以て服する也。既に乳母といふときは、母といふ名があるに、よ

斯くの如く、物と物とを分別すべき名稱即ち言語文字の正しからざるときは、此の分別に依據して秩序分別を保つ所の禮も亦正しからず。此の意義に於いて『名』は名分ともなる也。但し『名』の本來の意義は、名分といふよりも極めて廣し、名稱なり、言語なり、文字なり、單に名と禮との關係に於いてのみ、之れを名

孔子の政教論  
分となすも或は通ず。されど、子夏傳にいへる『名』とは名分にあらず、名號なることを忘るべからず。

言語文字を統一するを以て教化の發端となせるは、子路等の解し能はざりし所に於て、而して大に孔子の卓見を知るに足る也。更らに孔子が子路に告げたる語を讀み、其の所謂正名を以て、當時民衆の用ゐる言語の區々なるを統一するの義に解し來れば、其の說始めて明瞭なるを覺ゆ。思ふに當時列國對峙して、周禮に所謂書名を四方に達して天下の語言文字を同じくするの政も久しく絶え、荆蠻淮夷戎狄等は盛んに中國に雜居し來りつゝ、あれば、言語文字の紛亂せしこと想像に餘りあり。現に齊楚全く語音を異にせしと孟子(滕文公下)にも見ゆ。されば王政を理想とする孔子が、之れを統一せんと志させるは、固より其の然るべき所なり。而して之れを統一すべき標準語としては、中夏古來傳統せる語言文字及び其の發音なりしことは、  
詩書執禮雅言なり。(述而)此の解は孔門の教  
授此中に述べたり  
と併せ考へて推察せらる。

孔子の政教の目的が、民を齊しくし均しくするに在りし如く、國語統一は即ち一種の思想統一也、造言の刑を以て少政卯を誅せしが如き、亦其の意を見るべしとせん。孔子の經世濟民の條參照是れ亦始皇の之れを過激に用ゐて失敗せる所なりき。統一といふことには必らず強制の伴ふものなるが故に、國語統一の如きは必らず主權者の事業ならざるべからず、左の言中に在る『君の司る所也』とは是れ也。

新築の人仲叔于奚、孫桓子を救ふ、桓子こゝを以て免かる。既にして衛人之れに賞するに邑を以てす、辭す、曲縣と、繁纓以て朝せんことを請ふ、之れを許す。仲尼之れを聞いて曰はく、惜いかな、多く之れに邑を興ふるに如かず、唯、器と名とは以て人に假すべからず、君の司る所也、名以て信を出だし、信以て器を守り器以て禮を藏し、禮以て義を行ひ、義以て利を生じ、利以て民を平かにす、若し以て人に假さば人に政を興ふる也、政亡べば則ち國家之れに従ふ、止むべからざるのみ。(左傳成公二年)

こゝに所謂『名』とは前の正名の『名』と同也。杜預は解して『名は爵號』



と註すれども、名の意義が爵號といふにはあらず、名は事の名稱、物の名號なるが故に、此の文に於いてのみ偶、爵位の名として解し得るに過ぎず。嘗に爵位の名のみならず、事物の名を制することは、總べて臣下に假すべきにあらずして、君の司るべきもの也となす也。茲に名と器とを並べ言ふは、器も亦一王の制を仰ぎて、天下之れを同じくすべきものとなすを以て也、車服度量衡の如き是れ也。例へば、左傳に

天子七月にして葬る、同軌畢く至る。(隱公元年)

とあり、同軌とは政令の及ぶ全範圍を言ひ、四夷に分つ也、即ち一王の下に於いては、車軌皆之れを同じうする也。又管子に、

戈兵は度を一にし、書は名を同じくし、車は軌を同じくす。(君臣上)とあり、又中庸に、

天下、車は軌を同じくし、書は文を同じくし、行は倫を同じくす。

とあり、共に天下一王の理想をいふものにして、器と名とを同じくするは、天下を統治する主權者の大權に屬すとなせるを見るべき也。中庸の言の結句は、又思

想の統一をも併せ言ふものにあらずや。

孔子子貢に謂ふ、嘗て曰く、予れ言ふ勿らんと欲すと、他日則ち曰ふ、吾れ回と言ふ終日と、又何ぞ言の一ならざるや。蓋し子貢は専ら聖人を言語の間に求む故に孔子、言なきを以て之れを警しめ、之れをしてこれを心に實體し、以て自ら得るを求めしむ。顔子の孔子の言に於ける、默識心通、己れに在らざるなし、故に之れと言ふ終日、江河を決して海に之くかごとき也。故に孔子の子貢に於ける、言なきも少なしとなさず、顔子に於ける、終日言ふも多しとなさず、各其の可なるに當るのみ。(傳習錄徐愛の序)

## 孔子終

孔子と我が日本と

「子、九夷に之かん」と欲す。(今本、居らんと欲すとあるは誤)或るひと曰く、陋しき之れを如何。子曰はく、君子之れに居る(居らばと讀むは誤)何の陋しきことか之れあらん(子罕)の語に依り、孔子は我が日本に移住するの志ありたりと根本先生、重野先生等は解さる。如何にも『山海經』に『東方に君子國あり』などあるを見れば、古來支那にては海外の東方に理想的の美國ありとの傳説ありしと見え、孔子、時勢に徼せし餘、眞に此様の國あらば其れに移らんと欲せざらんも、こは只一の空想的傳説に過ぎずして、直ちに此の君子國を地理的に我が日本なりとするは早計ならん。『四書攷異』に、『聖人の旨、意を託して世に激するに在り、或は遂に實に居らんすといふ、其の人未だともに莊論すべからざる也。(中略)山海經に云ふ、海外東方君子國あり、其の人皆衣冠帶劍、讓を好みて争はずと。子乃ち謂ふ、東方居る所、能く是の如きの國あらば、何そ概して其の陋を謂ふべけんやと。此れ亦梓材、匏瓜の答の如し。(下略)』といへり。一の誠誠となすは當れり。孔子は神武紀元百九十年に生る、況んや、若し日本紀年が、史家の説の如くに、實際より非常に延長されありとせば、吾れに在りては神代以前の人、何れにもせよ、日本は未だ衣冠帶劍の君子國にはあらざりし也。孔子の此の言を奉會して、我が日本に來らんとせし志望ありしとなさずとも、現に孔子は今や來りて我が國に永住しつゝあるものなれば(第一篇第二章)此の以上多く求めんとするは、餘りに食るに過ぎたり。

本書索引

一 論語の語句

本書中に引用せるものは、其の典籍十百たゞならざるも、論語よりするもの亦少なからず近時論語を讀むもの多し、本書は一面より見れば、論語の逐章的解釋にあらずして、孔子の記傳、事業、性格及び學說の上より列序し、彙編せる一部の解釋と見られざるにあらざるが故に、左に先づ之れが索引を作る。  
論語の次序に従ひ、本書に引用せるものゝみを掲ぐ。  
冒頭又は主眼の一句のみを挙げ、他は略す。  
本書中、此の外尙ほ多けれど、一語一句を引くものゝ如き、主要ならざるものは皆略せり。

學而篇

學而時習之……………三三、三六、三九  
其爲人也孝弟……………二四、三六、三九  
吾日三省吾身……………二四、三六、三九  
道、千乘之國……………三三、三六、三九  
弟子入則孝……………三三、三六、三九  
君子不重……………三三、三六、三九  
夫子至於是邦也……………三三、三六、三九  
禮之用、和爲貴……………三三、三六、三九

爲政篇

恭近於禮……………七、八  
君子食無求……………七、八  
詩云如切如磋……………八、九、一〇、一一、一二、一三、一四  
爲政以德……………一  
詩三百……………一  
道之以政……………一  
道之以德……………一

八佾篇

吾十有五而志學……………一  
孟懿子問孝……………一  
與回言終日……………一  
視其所以……………一  
溫故而知新……………一  
君子不器……………一  
子貢問君子……………一  
學而不思……………一  
攻乎異端……………一  
由誨女知之乎……………一  
舉直錯諸枉……………一  
舉善教不能……………一  
子奚不爲政……………一  
子張問十世可知也……………一  
林放問禮之本……………一  
季氏旅於泰山……………一



### 憲問篇

南宮适問於孔子	六、五
愛之能勿勞乎	三
爲命	三
子路問成人	三、七、三九
戚武仲	三
晉從大夫後	三、三
古之學者爲己	三、九
君子耻其言	三、七
君子道者三	三、三、三三
子貢方人	三、六
微生畝問孔子	一、一
下學而上達	六、四、七
子路宿於石門	一、一
子擊磬於衛	三、一、三
上好禮	三、三、三三
子路問君子	三、三、三三
厚恤寡	三、一
問寡童子	三、一
衛靈公問陳於孔子	三、三、三三
子張問行	三、六

一以貫之	三、八、三、三六
顏淵問爲邦	三、八、三、三六
君子義以爲質	三、九
君子求諸己	三、三
君子矜而不爭	三、三
己所不欲勿施於人	三、一
人能弘道	三、一
吾嘗終日不食	三、一、三、三
君子謀道	三、三
當仁不讓於師	三、一
有教無類	三、一
辭達而已矣	三、一
師見	三、一

### 季氏篇

有國有家者	三、一、三、二
天下有道	三、一、三、二
祿之去公室	三、一
益者三友	三、一
君子有三戒	三、一
君子有九思	三、一
生而知之者上也	三、一
陳亢問於伯魚	三、一、三、三

### 微子篇

齊人歸女樂	九、三
子張篇	九、三
仕而優則學	九、三
仲尼爲學	九、三
子貢贊於仲尼	九、三
叔孫武叔毀仲尼	九、三
夫子之不可及也	九、三

### 堯曰篇

允執其中	六、八、二、五
不教而殺	三、一
不知命	三、一

## 二 主要なる解説

本書の目次には内容を節録しあり及び索引一には論語の語句を検出し得べし、此の二者によりて殆づ其の見んと欲するもの、大體を擇び出づべし。されば、此の索引には以上二者と重複せざる小節目を擧ぐるのみに止まる。イ、エ、エ、ガナ等は別にせず、大抵普通の發音に従ひ、正しき假名遣ひに拘泥せず、ソはカの部、カウはコノ部なるが如し。又一音の中の序列は錯綜す。忠實熱心なる讀者家は、本書讀過の間、更らに此の索引の足らざる處を補ひ、書き入れ給はば、他日之れを檢索するに非常の便宜あらん。

### ア

愛憎孔子の(又温情を見よ)	三、八
愛の理	九
哀公と孔子	三、一、四、三
足利本	三、一
安民の徳	九
安心立命	三、一、三
晏子と孔子	三、一、三

### イ

一貫一貫の道	三、一、三、二
一王の理想	三、一、三、二
一夫多妻	三、一、三、二
一隅と三隅	三、一、三、二
伊藤仁齋論語古義	三、一、三、二
今の教材と六經	三、一、三、二
淫聲	三、一、三、二
委吏	三、一、三、二
隱者と孔子	三、一、三、二
盲成	三、一、三、二
盲英の決心	三、一、三、二
遺物孔子の	三、一、三、二

### ウ

運命(命、天命、宿命等を見よ)	三、一、三、二
右史	三、一、三、二
易の作者	三、一、三、二
易の作者	三、一、三、二
衛に行く	三、一、三、二
衛生	三、一、三、二
永生せる性格	三、一、三、二
鄒子	三、一、三、二
衍聖公	三、一、三、二
圖説(圖説)	三、一、三、二

### エ

王政と覇政	三、一、三、二
應周	三、一、三、二
皇侃論語義疏	三、一、三、二
王陽明尙書後案	三、一、三、二
王陽明孔子家語	三、一、三、二
歐陽修詩本義	三、一、三、二
歐陽修周易童子問	三、一、三、二
己れの爲にする學	三、一、三、二
温情濃厚、同情、慈愛、哀、聖、聖	三、一、三、二
溫柔敦厚の詩教	三、一、三、二

### オ

開若嶺尙書古文疏證	三、一、三、二
-----------	---------





伏生	二五	換敵	三〇	孟僖子	一四、二〇	抑揚と教育	三三、三七
筆墨	二六	卜筮	二九、三三	孟懿子	一四、二〇、二四	欲節主義、禁欲主義	三三
諷刺的訓誨	二八	水鏡	三三、三六	毛奇齡論語解	二五		
佛序	三〇	墨子と孔子	一五、一六	毛詩詩の四派	二五		
文藝趣味	三〇	慢と謙	三〇	毛詩鄭箋	二五	禮記	一六、三〇、三六
文(文章、文化、文體)	二六、二七、二八、二九、三〇	學べば固ならず	二九	毛詩集解	二五		
文宣王	二九	道(一貫の道)	二五、二六、二七、二八、二九	文字につき	二六	理想的人格	四一、四二、四三、四四
文武と孔子(文武を祖述す)	二六	身分と理想	二五	問答的教式	一七、一八	理會	三三、三四、三五、三六
分類分權	二七、二八、二九、三〇、三六	民衆教化	二五	野郡學徒の	三〇	六藝(漢の六藝)	三三、三四、三五、三六
ヘ		民間傳説	二五	有子	二五、二六、二七	六藝(漢の六藝)	三三、三四、三五、三六
ヘルバルトと儒教	二五	務本主義	二五	男	二五、二六、二七	六經の教育的意義	三三、三六
平凡なる偉人	二五	命(天命、運命、宿命)	二五、二六、二七	悠々自適	二五	立教の主旨	三三、三六
勉強	二五	名分を正す	二五	愉快教育の	二五	兩端を叩くの教授	三三
辯證法と教授	二五	名譽	二五	幼時	二五		
ホ		明虫を求む	二五	幼學	二五		
保舉	二五	孟子と荀子	二五、二六	陽虎	二五		
朋友	二五			楊子と孔子	二五		
褒成宣尼公	二五			養老	二五		
釋教	二五			養教	二五		
禮樂	二五、二六、二七、二八、二九、三〇						
禮樂刑政	二五						
禮樂の整理	二五						
麻社	二五						
歴史の體裁	二五						
ク							
骨を去る	二五						
骨に歸る	二五						
老子と孔子	二五、二六						
老彭	二五						
六國陰謀の書	二五						
六十四卦の意義	二五						
論語の編纂	二五						
論語集解(何晏)	二五						
王仁麿來の論語	二五						
和氣寛裕	二五						

索引

禮樂	二五、二六、二七、二八、二九、三〇
禮樂刑政	二五
禮樂の整理	二五
麻社	二五
歴史の體裁	二五
カ	
骨を去る	二五
骨に歸る	二五
老子と孔子	二五、二六
老彭	二五
六國陰謀の書	二五
六十四卦の意義	二五
論語の編纂	二五
論語集解(何晏)	二五
王仁麿來の論語	二五
和氣寛裕	二五

念に念を入れて下筆したりとはいへ、校正を終りて一讀すれば、尙ほ言ひ足らざりしと思ふものゝ湧き出づるを覺ゆ。是れ決して當初に於ける疎漏にあらず、寧ろ此の間に於ける余が研究の進歩也。

例へば、論語の中に、孔子は、我れに數年を假し五十以て易な學べ、云々の外、易を言ふことなしと概説せしむ、「三人行くと其の如き、其の徳を恒にせず云々の如きは、まさしく易中の文句を引き來りしものと思はる。

又「履、履ならず、履ならんや、履ならんやの言の如き、名と器との正しきを失したること、即ち國語の紊亂を正したるものに相違なきが故に、孔子の雅言論正名論、即ち國語統一の一傍證とすべかりし也。

此等は尙ほ他の新研究を加へて、改版のときに於ける補足の料となすべし。

孔子の述冊を序述するに當り、『孝經』につきて説明せるに因み、禮記中の一篇にして、今の四書の一典なる『大學』の書にも言ひ及ぶべかりし也。即ち左に一貫す。

大學一篇、孔門の流を汲めるもの、手に出でたるならん。程子は孔氏の遺書となし、朱子章句の首、朴朱は曾子の傳ふる所(其の序文)とせるも、共に明證あるにあらず。周氏の尙書古文疏證卷二に大學を論じ、朱子が之れを孔氏の遺書となせるは、臆意章に在る曾子曰の三字より推度して孔子の遺教を曾子の門人が録せるものと思ひしならんも、諸書に多く曾子をいふより見れば、古書著者の知り難きを曾子に附會すること、が通例なりしならんと云ひ、最後に、大學書中に爾雅の『切々』は學を道ふ也』を引けるより推して、斷じて曰はく、

班固謂ふ、記百三十一篇、七十子の後、學者記する所と。則ち知る、大學は七十子の後、叔孫通、梁文、此の二人は爾雅の最後の増補者也以前に出づるや、必せり。

と。蓋し通論なり。宛秦初漢の交、學者古へを知るもの、記述せし所ならん。

明治四十三年十一月十五日印刷

孔子

明治四十三年十一月十八日發行

正價金壹圓貳拾錢



著者 白河次郎

發行者 伊東芳次郎

印刷者 金子久太郎

印刷所 三協印刷株式會社

發行所

東京市本郷區本郷一丁目  
電話下谷一九三八番  
振替東京一七一番

東京堂

特約大賣捌

東京神田區神保町  
振替東京二七〇番  
大阪北波邊町角  
振替東京二八三番

東京堂 杉本書店

名古屋屋本町  
振替東京五八〇一番  
久留米米屋町  
振替大阪二三五七番

川瀬書店 菊竹書店



「孔子」を讀める者亦必は遠藤博士の孔子傳を見よ

文學博士 遠藤隆吉先生新著  
新刊 孔子傳

菊判 約三百五十頁  
裝釘 高雅 箱入  
定價 金壹圓四十錢  
郵稅 金十二錢

現代漢學界の巨擘遠藤博士が深遠なる學識を傾け様大なる筆を揮つて茲に東亞の大聖孔子を傳すと云はゞ敢て又別に時流の廣告的文字を列ぬるの要なかるべけむも試みに少しく言はむかその涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ蓋し本書一たび出でてここに東洋人の孔子に對する二千年來の迷妄謬見を打破し肉あり血ある大聖孔子の眞面目は紙上に躍如たらむ翼くは世の東洋學術の精髓を味はむと欲する人靈界の偉人に接して修養の資を得むと欲する人悉く來つてこの空前にして而して唯一なる「孔子傳」を讀め

發行所 東京區小石川丙午出版社(賣捌) 東京區本町一丁目 東亞堂

東亞堂出版圖書大賣捌所

東京日本橋 同日本橋 同日本橋 同京橋 同京橋 同京橋 同神田 同神田 同神田 同神田 同神田 同神田 同神田 同麻布 同麻布 同本郷

至誠堂	同小石川	若林書店	長野市	博文社	博多市
林平次郎	同京都市	資文館書房	松本市	西澤書店	西澤書店
文林堂	同	東枝律書房	長岡市	水琴堂	水琴堂
目黒書店	同神戶市	資文館支店	新潟市	目黒書店	目黒書店
前川書店	同名古屋	小澤百架堂	金澤市	萬松堂書店	萬松堂書店
東海堂	同名古屋市	星野文星堂	札幌市	宇都宮書店	宇都宮書店
北隆館	同岡山市	山陽書籍會社	小樽市	富貴堂書店	富貴堂書店
上田屋	同廣島市	友田書店	弘前市	白鳥書店	白鳥書店
武藏屋	同同	積善館支店	秋田市	今泉書店	今泉書店
勉強堂	同熊本市	長崎書店	青森市	成見書店	成見書店
崇文館	同同	金書堂書店	宇都宮	今泉支店	今泉支店
二松堂	同鹿兒島	谷村書店	朝鮮京城	內山集英堂	內山集英堂
日本堂	同大分市	甲斐治平	清國大連	日韓書房	日韓書房
森江書店	同大分市			大阪屋書房	大阪屋書房

東亞堂出版圖書大賣捌所







<p>○<b>運命之改造</b> 正價六十錢 期內新泉先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>偉人修養史</b> 正價五十錢 破宛 禪居士著 送料六十錢</p>	<p>○<b>偉人の風化</b> 正價五十錢 德富蘇峰先生序 鹽見文山先生著 送料六十錢</p>	<p>○<b>修養百話</b> 正價六十錢 德富、加藤、大町、山路、松村五先生序 菊池曉汀先生編 送料八十錢</p>	<p>○<b>自修論</b> 正價六十錢 哲學博士シロントツ下教授原著 堀河原無咄先生譯補 送料八十錢</p>	<p>○<b>禁煙の實驗</b> 正價四十五錢 安田 操 一先生著 送料六十錢</p>	<p>○<b>氣法</b> 正價五十五錢 足立栗園先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>氣術</b> 全一册(近刊) 熊代彦太郎先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>膽力之鍊養</b> 正價五十五錢 足立栗園先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>禪と修養</b> 正價五十錢 大内哲樹居士序 釋悟庵師著 送料八十錢</p>	<p>○<b>禪と活動</b> 正價四十五錢 宗演禪師、無邊快禪題詞 破宛禪居士著 送料六十錢</p>	<p>○<b>動中靜觀</b> 正價四十錢 渡邊照岩、佐々木諸家題序 茅原祥山著 送料六十錢</p>	<p>○<b>湖まぢ草</b> 正價八十五錢 幸田 露 伴先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>大人物論</b> 全一册(近刊) 幸田 露 伴先生著</p>	<p>○<b>修養日記</b> 全一册(近刊) 加藤唯堂先生立案 修養會編輯(四十三年以降逐年續刊) 送料八十錢</p>	<p>○<b>習慣の勢力</b> 全一册(近刊) 大住 舜 先生著</p>	<p>○<b>人格修養の基礎</b> 全一册(近刊) 文學博士三宅雪嶺先生序 惠美光山先生著</p>
--	--	--	--	---	---	--	--	---	---	---	--	--	---	--	---	--

▲歷史・傳記・立志傳類

<p>○<b>世界文明推移史論</b> 正價五十錢 茅原 華 山先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>朝</b> 正價一圓十錢 幸田露伴先生著 隈井紅兒君編 送料八十錢</p>	<p>○<b>直江山城守</b> 正價一圓二十錢 福本日 南先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>大鹽平八郎</b> 正價一圓五十錢 文學士 幸田成友先生著 送料十二錢</p>	<p>○<b>深草の元政</b> 正價七十錢 故尾尾隆齋師校因 青山隆村先生著 送料八十錢</p>	<p>○<b>俳味禪味</b> 正價四十錢 文學士 沼波瑣音先生校因 宮垣四海先生著 送料四十錢</p>	<p>○<b>偉人修養史</b> 正價五十錢 破宛 禪居士著 送料六十錢</p>	<p>○<b>古英雄の生活觀</b> 正價三十錢 足立栗園先生著 送料四十錢</p>	<p>○<b>終篇西郷南洲</b> 全一册(新刊) 伊藤 痴 遊先生著</p>	<p>○<b>勝海舟傳</b> 全一册(近刊) 伊藤 痴 遊先生著</p>	<p>○<b>坂本龍馬</b> 全一册(近刊) 伊藤 痴 遊先生著</p>	<p>○<b>人星</b> 全一册(近刊) 伊藤 痴 遊先生著</p>	<p>○<b>西郷南洲言行錄</b> 正價六十錢 白田石 楠先生編 送料八十錢</p>	<p>○<b>福澤翁言行錄</b> 正價三十五錢 藤田長 江先生編 送料四十錢</p>	<p>○<b>少年武士道</b> 正價各四十錢 編輯新聞記者 熊田洋城先生著 送料各六錢</p>	<p>○<b>西郷南洲</b> 正價各九十五錢 福本日南先生序 長谷場致堂先生序 伊藤痴遊先生著 送料各八錢</p>
---	--	---	--	---	--	--	--	---	---	---	---	---	---	--	--

○**修養偉人の風化** 藤見文山先生著 正價五十錢 送料六十錢

○**靖獻遺言講話** 加藤唯堂先生講述 全一册(近刊)

○**新會我物語** 幸田露伴先生著 全一册(近刊)

○**新訂義經記** 芳賀博士序 笹川文學士序 御橋粂風先生校註 全一册(近刊)

▲青年必讀書類

○**讀書法** 加藤唯堂先生著 正價九十五錢 送料八十五錢

○**雄辯法** 加藤唯堂先生著 正價七十錢 送料各八十錢

○**獨學法** 藤田日東先生著 正價四十錢 送料六十錢

○**時間活用法** 堀内新泉先生著 正價六十錢 送料八十錢

○**腦力養成法** 醫學士木村睦太郎先生校閱 漆山又四郎先生著 正價四十五錢 送料六十五錢

○**膽力の鍊養** 足立栗岡先生著 正價五十五錢 送料八十五錢

○**動中靜觀** 芳賀博士序 御橋粂風先生校註 正價四十錢 送料六十錢

○**默想の天地** 文學士 沼波環音先生著 正價四十八錢 送料六十八錢

▲文學書類

○**潮まらち草** 幸田露伴先生著 正價八十五錢 送料八十五錢

○**小はるさめ集** 幸田露伴先生著 正價七十五錢 送料八十五錢

○**一日物** 幸田露伴先生著 沼田頼川先生註 正價四十錢 送料四十五錢

○**全力の人** 堀内新泉先生著 大野解力川面義雄兩君註 正價六十五錢 送料八十五錢

○**邦口米次郎先生著** 野口米次郎先生著 正價七十五錢 送料八十五錢

○**文邦日本少女の米國日記** 正價七十五錢 送料八十五錢

○**英雄雄三錄** 楓村居士著 正價六十錢 送料六十錢

○**新寫生文** 高濱虛子先生編 正價五十錢 送料八十錢

○**秋元蘆風先生詩集** 秋元蘆風先生著 正價四十錢 送料六十錢

○**徒然草新釋** 文學士 沼波環音先生著 全一册(近刊)

○**默想の天地** 文學士 沼波環音先生著 正價四十八錢 送料六十錢

○**趣情景** 德富蘇花先生序 角田清々歌客先生著 正價四十錢 送料六十錢

○**琴** 龜谷天尊先生著 正價四十五錢 送料六十錢

○**百人一首通解** 佐藤仁之助先生著 正價二十錢 送料二十錢

○**英文學講話** 東京高等師範學校講師 戸川秋骨先生著 正價三十五錢 送料四十五錢

○**シラノの歌評釋** 山口小太郎先生序 秋元蘆風先生著 正價七十錢 送料八十錢

○**英文學講話** 東京高等師範學校講師 戸川秋骨先生著 正價三十五錢 送料四十五錢

○新訂 曾我物語 全一册(近刊) 幸田露伴先生著

○八犬傳物語 正價八十五錢 送料八錢 伊藤銀月先生著 小松未醒先生註

▲俳諧・和歌・漢詩書類

○俳句大成 正價四十二錢 送料八錢 幸田露伴先生序 文學士笹川龜風先生序 沼波瑣首先生註

○俳味禪味 正價四十錢 送料四錢 文學士沼波瑣首先生校閱 宮垣四海先生著

○俳句講話 正價四十錢 送料六錢 文學士佐々木醒齋先生序 文學士沼波瑣首先生著

○和歌作法 正價三十錢 送料四錢 文學士武島羽衣先生序 志賀華仙先生著

○俳句研究 正價四十錢 送料六錢 文學士久保天晴先生序 文學士沼波瑣首先生著

○新案百人一首通解 正價二十錢 送料二錢 文學士尾上柴舟先生述

○研句階梯 正價三十錢 送料四錢 文學士沼波瑣首先生校訂

○新派和歌講話 全一册(近刊) 正價二十錢 送料二錢 町田柳塘先生著

○俳諧古選・新選 正價四十錢 送料六錢 鳴鶴竹冷・瑠璃三大家題序

○訂正漢詩講話 正價五十錢 送料六錢 町田柳塘先生著

○人生俳句集 全一册(近刊) 文學士沼波瑣首先生著

▲作文 國語 漢文 書類

○速成漢學捷徑 正價二十錢 送料十二錢 東京開成中學校國語漢文科講師佐藤仁之助先生著

○漢字異同辨及用法 正價二十錢 送料二錢 東京開成中學校國語漢文科講師佐藤仁之助先生著

○國語漢文要語詳解 正價四十五錢 送料六錢 東京開成中學校國語漢文科講師佐藤仁之助先生著

○國語異同辨 附假字表 正價十五錢 送料二錢 佐藤仁之助先生校補 東亞堂編輯所編

○假字用法及誤動詞區別表 正價六錢 送料二錢 東京開成中學校國語漢文科講師佐藤仁之助先生著

○作文法講話 正價三十錢 送料四錢 文學士大町桂月先生著

▲漢籍 講義 書類

○老子講話 正價八錢 送料八錢 澤庵齋師細鈔 森大狂居士題詞

○辨語 正價五十錢 送料六錢 秋生祖徠先生遺著 文學士詳靈確悟先生校訂

○南洲言志錄講話 正價五十錢 送料六錢 佐藤一齋先生遺著 四鄉南洲翁手抄 白田石楠先生編

○靖獻遺言講話 全一册(近刊) 正價五十錢 送料六錢 淺見綱齋先生遺著 加藤咄堂先生講述

○沈靜錄 正價五十錢 送料六錢 野靜軒先生遺著 幸田露伴先生序 足立栗園先生註

▲語學書類

東京高等師範學校講師 月川秋骨先生著  
○英文學講話 正價三十五錢 送料六錢

山口小太郎先生序 秋元蘆風先生著  
○鐘の歌評釋 正價七十錢 送料四錢

▲宗教書類

大内青嶺居士序 釋悟庵師著  
○禪と修養 正價五十錢 送料八錢

宗演禪師 無邊快勝題 破宛禪居士著  
○禪と活動 正價四十五錢 送料六錢

▲社會實務書類

加藤唯堂先生著  
○雄辯法 正價七十錢 送料各八錢

堀内新泉先生著  
○時間活用法 正價六十錢 送料八錢

足立栗田先生著  
○古英の生活 正價三十錢 送料四錢

清國張廷彦先生閣 張毓靈宮澤文次郎兩先生合著  
○官話速成篇 正價三十五錢 送料四錢

清國張廷彦先生閣 張毓靈宮澤文次郎兩先生合著  
○東語速成篇 正價十五錢 送料二錢

加藤唯堂先生著  
○補冥想論 附坐禪論 正價五十錢 送料八錢

松波博十序 明治大學法學士原田定道先生著  
○手形取引の顧問 正價八十錢 送料八錢

理學士藤田外次郎先生校閱 鹿田久村先生編  
○百科ポケット顧問 正價三十錢 送料四錢

經世學人先生著  
○生活問題の解決 全一冊(近刊)

▲衛生書類

熊代產太郎先生著  
○深呼吸健康法 正價五十五錢 送料八錢

足立栗田先生著  
○鍛練養氣法 正價五十五錢 送料八錢

醫學士 木村麟太郎先生著  
○腦力養成法 正價四十五錢 送料六錢

加藤唯堂先生著 本多五段先生著  
○秩序朝起の勧め 正價卅五錢 送料四錢

▲雜門

理學士藤田外次郎先生校閱 鹿田久村先生編  
○百科ポケット顧問 正價三十錢 送料四錢

ドクトル高士川游先生序 澤田順次郎先生著  
○科學より男女の關係 正價三十五錢 送料四錢

前東京高等師範女學校講師山田東明先生著  
○實用洋式裁縫全書 全二冊(近刊)

大場健兒先生著  
○どもり矯正の實驗 正價二十五錢 送料四錢

安田操一先生著  
○禁煙の實驗 正價四十五錢 送料六錢

大日本催眠學會長 小野福平先生著  
○催眠術治療精義 正價九十錢 送料八錢

東京開成中學校理科講師山下祥輔先生著  
○補考化學解説 全一冊(近刊)

○補考物理解説 全一冊(近刊)

白田亞瀨先生著  
○最近學校評論 正價四十錢 送料六錢



▲叢書・全書類

〔咄堂叢書〕

加藤咄堂先生が多方面に亘れる研究論文を網羅し各巻各題書架の美観なり

○加藤咄堂先生新著  
第三卷 宿命論 全一冊(續刊)

○加藤咄堂先生新著  
第一卷 讀書法 (製本版成)

送正料八十五錢

○加藤咄堂先生新著  
第四卷 佛教大系 全一冊(續刊)

○加藤咄堂先生新著  
第二卷 世態論 全一冊(近刊)

送正料六十錢

○加藤咄堂先生新著  
第五卷 解脫論 全一冊(續刊)

〔咄堂小品〕

加藤咄堂先生の漫録、隨感、小論文、短篇等を輯め、裝釘清雅趣味横溢

○加藤咄堂先生新著  
第三篇 文話詩話 全一冊(近刊)

○加藤咄堂先生新著  
第一卷 自警錄 (製本版成)

送正料六十錢

○加藤咄堂先生著  
第四卷 涉獵漫錄 全一冊(近刊)

○加藤咄堂先生著  
第二卷 文字禪 全一冊(近刊)

送正料六十錢

〔車上叢書〕

古今に亘て百讀倦まざる和漢の珍本名著五十巻を撰び、一々訓讀註釋を附す

(2) 野村胡堂先生遺著 幸田露伴先生序 足立栗園先生註  
清語沈黙錄 送正料六十錢

(1) 佐藤一齋先生遺著 四郷南洲翁手抄 白田石楠先生編

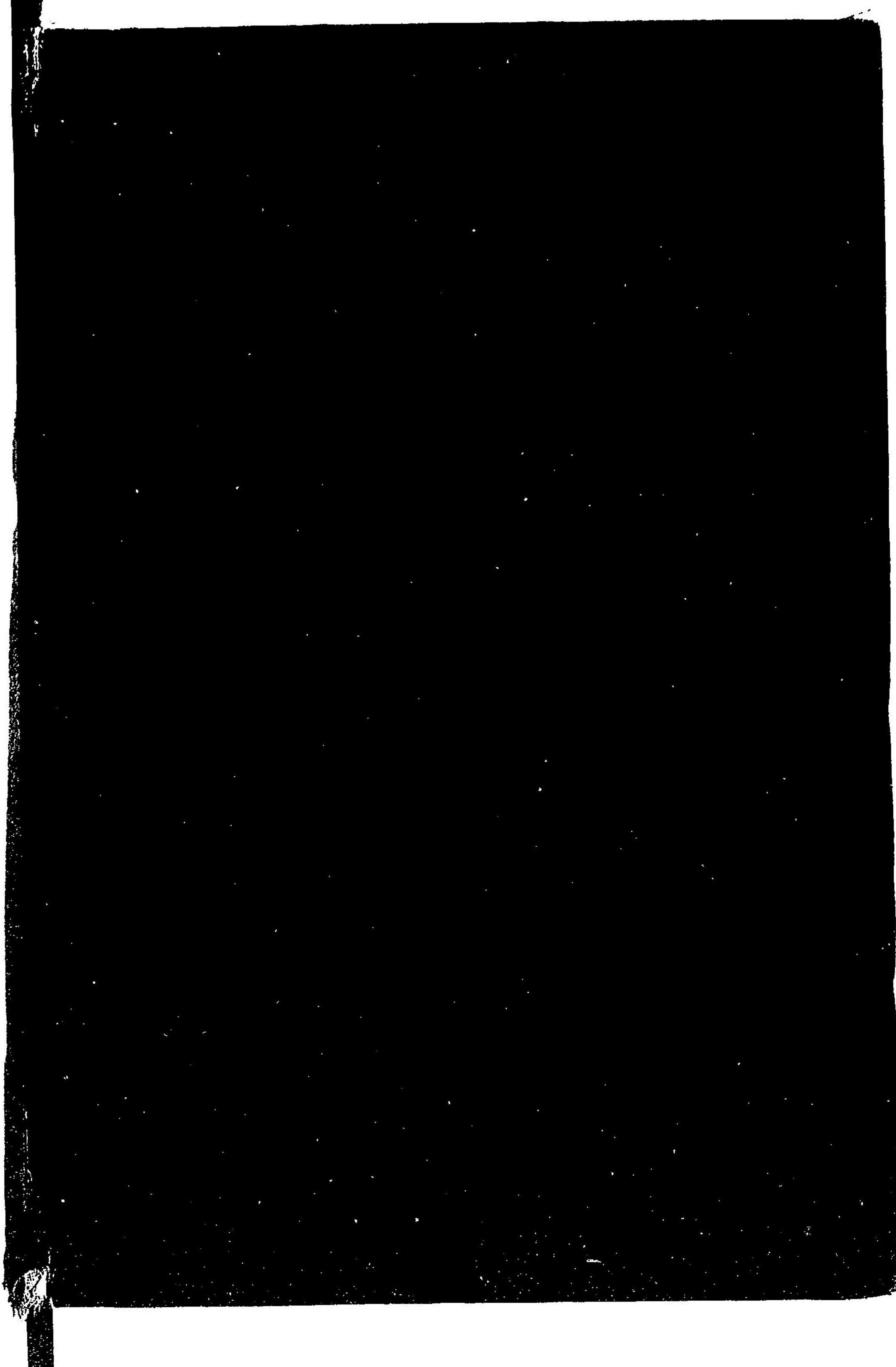
南洲言志錄講話 送正料六十錢

(3) 兼好法師遺著 文學十沼波環音先生校註  
訂新つれつれ草 送正料六十錢

GANNANDO-SHOTEN  
HANDA TOKYO  
店書堂南巖

CL

NO. 24195



M

008216-000-3

124.2-Si555k

孔子

白河 鯉洋/著

M43

AAC-0090



